

歌川国貞画『睦月わか湯の図』—初春の福尽くし—

文化女子大学准教授(日本服飾史担当) 福田 博美

「日本」を代表する絵画の一枚に葛飾北斎(1760-1849)の「富嶽三十六景 神奈川沖浪裏」がある。服飾界ではクリスチャン・ディオールの2007年春夏、パリ・オートクチュールコレクションにおいてジョン・ガリアーノ(1960-)が麻のコートに青色の手染めと刺繍で再現した。ところが、江戸時代の人々にとっての人気絵師は、北斎より今回紹介する歌川国貞(1786-1864)であった。

国貞は、初代歌川豊国(1769-1825)の門人で、弘化元(1844)年、二代豊国(実際は三代)を襲名した。嘉永6(1853)年刊『江戸寿那古細撰記』には「豊国にかほ 国芳むしゃ 広重めいしょ」とあり、国貞(豊国)は役者の似顔絵を中心に美人画や源氏絵などの分野で佳作を残し、作画量も最大をほこる浮世絵師である。

「睦月わか湯の図」(PF042/721.8/U)は、大判錦絵(多色摺版画)の三枚続(36×76cm)で、版元は江戸の山口屋藤兵衛である。落款(雅号の印)は左右に一陽斎豊国画、中央に香蝶楼豊国画とあり、当時は雅号が併用された。錦絵の検閲印が名主二人の印である点から弘化4(1847)年から嘉永6(1853)年の作である。正月の若湯(初湯)の光景を画題として三美人を描いたものである。

銭湯は、寛政3(1791)年に男女混浴の禁令が出され、文化年間(1804-18)に入口で男湯と女湯を分けて別々の浴槽をもつ風呂屋(湯屋)の登場により発展する。町人は元日が休みで、初湯は二日の早朝より夕方までである。本図では銭湯の入口に門松がみられる。暖簾には〇〇湯と紺地に白く染め抜くのが普通であるが、この図では版元の「山口」を白抜きにしている。

暖簾をくぐり、新年の挨拶をする客は髪を三つ輪(三つの髷から成る)に結び、玉簪をつけて横櫛の姿である。横櫛は初代尾上菊五郎の妻が禿を隠す

ために始めたとされるが、当時は粋であった。黒の掛衿に、黒の鯨帯(表裏の生地を変えた帯)は流行の伊達風俗である。幕府の禁令により、服装は年齢の別なく、渋く地味な色調が好まれた。この女性は、裾に綿を多めに入れた流行の縞柄のきものを着、手には豆絞りの手拭と浴衣を入れた風呂敷包みを持つ。寒くても足袋を履かずに、素足で黒塗りの下駄をはいた。当時、これを伊達の素足と称した。

正月の初湯、五月の菖蒲湯、冬至の柚子湯の時には、湯銭のほか、祝儀として小銭を入れたおひねりをあげた。ここでは豊印の酒樽の上ののせた大三方に盛られる。番台の右側には貸手拭や糠袋が掛けられた。糠袋は身体を洗う時に用い、湯に浸して洗うと、米糠の乳化液がしみ出て肌がなめらかになる。右端の大箆の中にはお年玉が入っており、初湯の客はこれをもって帰るのである。

弁慶格子(縦横同じ幅の基盤縞)の半纏を着た番台の娘は、島田髷に結び、梅紋を彫った平打簪に動く揺れる蝶のびらびら簪をつけ、元結には緋縮緬で髪飾りをした。きものは薄茶地の縞柄で、緋鹿の子の幅広帯をしめた。衿元と袖口、足元に覗く緋色の襦袢が色香を漂わせる。

娘は来客に、草双紙を読むのをやめて挨拶している。浅葱色の裏表紙に源氏香(5本の線の組み合わせによってできる52種の図に『源氏物語』の巻名をつけた)模様の草双紙は、国貞が挿絵を担当した柳亭種彦(1783-1842)著『修紫田舎源氏』であろう。これは、文政12(1829)年の初編から天保13(1842)年の38編まで熱狂的な人気を博した。本図にみる立ち美人図の表紙にその宣伝効果を垣間見る。国貞は浮世絵界に「源氏絵」の新しい分野を確立させたのである。

番台下には、風呂から上がった人のために、茶釜

に湯を沸かし、茶碗が用意されている。手桶に輪飾りがみられることから、若水を汲んだものである。「若水」は「初水」とも「福水」とも称され、元日の早朝に年男が井戸から汲む水のことである。これを飲むとすべての邪気を払うといわれる。古くは若返りの水の信仰から発展して、立春の水を差し上げると邪気を除く効き目があると考えられていた。新春は年が改まるだけではなく、心身共に改まるもので、客への心遣いがみられる。

中央の階段を上ると、二階は娯楽室になっていた。当時の風呂屋は板間で、一部分に薄縁を敷いて身仕舞いをした。左図の女性は、つぶし島田の前髪に櫛をかざし、湯上りに汗取り用として浴衣を着る。右手の手拭の先には、糠を捨てた糠袋を結びつけた。浴衣は浅葱色の縦の三筋立てに、藍色で「壽」の字を蝙蝠が飛ぶ形で表した。文字を配したきものには「寿」「福」など縁起の良いものが好まれた。蝙蝠の「蝠」の字が中国では「福」と同音であるところから慶事、幸運のしるしとされる。蝙蝠の絵と寿の文字を組み合わせたデザインは「福寿」を表し、長寿と幸福の基本と考えられている。また、蝙蝠模様は文化年間半ば頃から七代目市川團十郎(1791-1859)の使用により流行し始めた。

特に国貞は、彼と親しい間柄であった。同じ版元による「卯の花月」には、粋な初鯉売りと長屋の人々がいきいきと描かれ、おかみさんのきものには壽の字海老の模様がみられる。七代目團十郎の雅号を「寿海老人」、「子福長者」とつけた由縁と模様が関連するようである。

風呂場の様子に目をやると、洗い場と上がり場の境には、長い青竹を組み合せた水はけの溝が設けられた。客が身体を洗う流し場は、水はけのいいように中央をやや低くした板張りであった。銭湯は社交場や情報提供の場としての機能をもっていたため、板の間の壁には宣伝広告用に化粧品、薬、芝居、寄席の引札(ちらし)を貼った。本図には名酒の広告がある。

若湯に福水、福寿模様、福尽くしの初春を飾るめでたい浮世絵は、当時の世相を知る好資料といえる。一見地味な三美人が、実は最新のおしゃれ美人であった。国貞が髪型から服装、履物などに流行を表現できたのは、その発信者となる歌舞伎役者との関係が推察される。また、精緻な風俗描写は写実性を重視した歌川派の特徴を表す。最後に、国貞の役者絵の魅力は新藤茂著『五渡亭国貞役者絵の世界』に熱く語られている。



歌川国貞画「睦月わか湯の図」

江戸時代末期、正月「初湯」の光景